

北京外国語大学国際シンポジウム「東アジアの智慧と東アジアの関係」

〔報告概要（報告順）〕

「東アジアの国際政治と和の外交」

東郷和彦（京都産業大学世界問題研究所長） 通訳：岑

東アジアをめぐる現下の国際政治は、米国と中国の激しい対立がその基調となっている。この米中対立は、グローバルな国際政治の基調となり、その対立の規模と激しさにおいて、これから当分の間国際政治の基調を構成していくとみられる。特に、第四次産業革命と呼ばれるようになった技術の極端な進歩によるグローバルな構造変化は、世界全体を米中を核とする二つの異なった技術の相互世界に分離する（mutual decoupling）可能性を顕在化させている。

これまでの伝統的な国際政治論でこの事象を理解しようとするならば、力を基礎とするリアリズムによっても、価値を基調とするリベラリズムによっても、あるいは、社会の中で自らの自己意識を構築していくコンストラクティズムによっても、この mutual decoupling の罅から抜け出すことは容易ではない。

翻って、このような米中対立の中でそのいずれかの世界に引きずり込まれることが、日本外交の中に内在してきた「和の外交」の帰結となるとは思えない。わかりやすく言えば、それが日本の国益となるとは到底思えない。それでは、以上のこれまで人類が遭遇したことの無い事態で、日本発の「和の外交」は如何に機能しうるのであるのか。

本稿は、2018年9月貴陽においてパワーポイントによって、更に、2019年8月31日付けでエッセーとして著述した“Karl Jaspers, Axial Age in the 21st Century, Civilizational Message from Japan”の思考を、一歩深めようとするささやかな試みである。

「日本人の思考様式Ⅱ～和という見えざるルール～」

中谷真憲（京都産業大学世界問題研究所/法学部教授） 通訳：北京外大

2018年9月、貴陽における国際学術会議「枢軸時代と中国」において報告した「21世紀の枢軸時代と日本人の思考様式～無・間・和～」の続編となる。今回は、日本最初の憲法とされる十七条憲法にはじまる「和」の概念について考察する。十七条憲法の成立時期については諸説あるが（一般には604年）、いずれにしろ中国から儒教、仏教を受容しつつ国家としての制度を整備していく時期に当たる。そして「和」は、政事（まつりごと）における独断を避けるために導入されたと理解される。しかし憲法全体の基調となった「和」は、日本的な概念として、五常（仁義礼智信）とは別に、その後独特の発展を遂げていく。たとえば江戸期の国学においては儒教体系に対置され、真情の発露としての側面（和歌の精神）が強調される。歴史の中でさまざまに変奏されつつも、一貫して日本文化の中核にあった「和」は、神道の「正直」の概念とも関係しつつ、日本的な職業倫理と企業の組織文化にもつながっている、と報告者は考えている。この思想的系譜に関するささやかなスケッチを試みたい。

中国的公共領域としての「包(パオ)=第三領域」―近現代中国経済社会を理解する手がかりとして―
岑智偉（京都産業大学世界問題研究所/経済学部教授）

〔概要〕

本論文は柏祐賢の「包」と黄宗智の「第三領域」を歴史的な中国「公共領域」として、近現代中国の経済社会を理解するための新しい中国的「公共領域」、即ち「間（あわい）」＝公共としての「包＝第三領域」をその延長線上で考え定義し、帝政晩期から今日までの動的な「伝統中国」における中国的「公共領域」である「包＝第三領域」（「公共領域ⅰ」～「公共領域ⅲ」）を動的経済社会システム（動学モデル）で歴史的に示している。

論文は「包＝第三領域」を中国独特の「公共領域」として、「国家」と「社会」の相互作用が繰り返されながら時代と共に変化していると考え。帝政晩期の「包＝第三領域」（公共領域ⅰ）は自律な論理性と特性を持つものであり、1949年から1970年代後半までの「包＝第三領域」（公共領域ⅱ）は国家の浸透により制度化されたものとなり、そして1970年代後半（政策転換）からの「包＝第三領域」（公共領域ⅲ）は前述の二つのものを融合しながら新たな「包＝第三領域」として生まれ変わったものとなる。

本論文は、1990年代以降の「包＝第三領域」（公共領域ⅲ）は旧ソ連のように急激に「西洋的諸要素」（論文の定義）への変動がなかったからこそ、その後の中国高度成長を実現させた安定的な社会的環境が与えられたと考え、その理由を動学モデルで示した。この分析から次のことが示唆される。即ち、どの時代においても、中国の歴史的変遷、そして「包」としての中国的経済社会システム、「第三領域」における国家と社会の独特な関係を正確に解釈しなければ、正しく今の中国を理解することはできない。決して西洋の経験から生まれた理想的な論理性だけでは中国の経済社会を観ることはできない。しかしその一方、「伝統中国」を強調しすぎると、再び閉鎖的社会にもなりかねない。その意味において、「西洋的諸要素」と「伝統中国」を俯瞰できる新しい「パラダイム」が必要であり、本論文の中国的公共領域としての「包＝第三領域」分析（動的社會システムモデル）は、動的な「伝統中国」と「西洋的諸要素」を客観的に俯瞰できる一つの新しい方法論を提供しているかもしれない。

「禪の十牛図からみる「東アジアの智慧」と西田哲学の「表現」思想」

森 哲郎（京都産業大学世界問題研究所/文化学部教授） 通訳：岑

世界問題研究所の前の企画『日本発の「世界」思想』において、筆者（森）は、『「主体」から「場所」へ』と題して、西田幾多郎の著作『日本文化の問題』（1940）を中心に、西田哲学の「世界への問い」を考察した。即ち、「縦」（時間）から「横」（空間）へと転換する「日本文化」が、「横」（空間）から「縦」（時間）へと転回する「世界＝歴史」の動向に如何に寄与するか、「東西文化の結合」が「日本という場所」（無の場所）へ収斂するという西田の「世界」思想を究明した。西田中期の名著『働くものから見るものへ』（場所論）は、＜場所から世界への転回＞において後期の「世界の自己表現」思想となる。西洋哲学の「主体」（＝実体）概念の超克として、『＜主体＞から＜場所＞へ』という転換として西田の「表現」思想を吟味探求してみた。

今回は、前企画の「日本発」を「東アジア発」へと新たに広げ深める探求として、また「東アジアの智慧」の一端に触れる試みとして、禪の修行の手引きである小冊子『十牛図』に着目したい。十二世紀

の中国（北宋）に現われた二種の『十牛図』、中国で普及した「普明の十牛図」と日本で普及した「郭庵の十牛図」との差異を比較吟味することで、日中「文化」の差異や「東アジアの智慧」の深みを看取できるだろう。さらに十牛図の伝統的な解釈を新たに再考吟味する試みによって、難解な西田哲学の成立、特に前期の「純粹経験・自覚・場所」という展開の意味と、西田独自の「表現」思想の新たな可能性を探求してみたい。